

KINGCA (Korean International Gastric Cancer Association) Week 2024 in Seoul に参加して

大阪市立総合医療センター 消化器外科 久保尚士

この度、2024年9月26-28日にソウルロッテホテルにて開催された KINGCA Week 2024 に参加しましたのでご報告させていただきます。本学会は、胃癌に特化した韓国の学術集会で、日本の胃癌学会と異なった点も多数ありましたので報告させていただきます。まず、口演は広めの3か所の会場に限定されており、とても見やすく感じられました。会場の外には、サンドイッチやコーヒーなどが給しされ、会場内に持ち入ることも可能でした。本学会のすべてのプレゼンテーションは英語で発表されており、参加者もアジアやヨーロッパ諸国、USAなどの多数の国から参加しており、英語で活発に Discussion されていました。

また、韓国は、多施設合同の臨床試験が多数行われており、その進捗状況なども、本学会が始まる前の早朝に報告されていました。どの試験も症例数がとても多く、集約化が図られている韓国ならではの、新しエビデンスが次々に創出されている理由がここにあると感じられました。私は、内臓肥満患者に対するロボット手術のメリットをポスター報告しました。参加者から多数の質問も頂きましたが、日本語ほど詳細に説明することができず、自分の英語力のなさを痛感しました。幸いポスターアワードも頂きとても素晴らしい経験をさせて頂きました。また、マスタークラスではないですが、個人的に本学会の前に延世大学の手術見学もさせて頂きました。手術は、Hyoung il Kim 先生のダヴィンチ SP システムを使用した胃全摘と Woo Jin Hyung 先生のライブ中継をしながらのロボット幽門側胃切除を見学しました。両手術とも3時間程度で手術が終了しており、とても素晴らしい手術でした。

現在、韓国では、研修医師やレジデント医師の政府に対するボイコット問題が発生しており、延世大学でもレジデントなしで手術を行っていました。以前から、本病院では、手術をアシストする nurse practitioner が多数存在しており、腹腔鏡手術では、術野に医師が一人、ロボット手術では、術野に医師がいない状態で手術がスムーズに進行していました。Hyoungil Kim 教授のお話では、ボイコット問題では、手術数が制限されているが、以前の70%程度の手術数で済んでいるとおっしゃってました。麻酔科医も挿管、抜管時のみに入室し、麻酔を維持するナースが麻酔管理を行っていました。そういった医師をサポートするシステムが発達していることと韓国の大病院ならではの効率化の追求が、こういった事態にも柔軟に対応できている理由だと感じられました。しかし、Kim 先生は、術後患者に何かあれば、すぐに自分の携帯電話に患者の状態を知らせるコールが頻回にかかってくるためとても大変だ、はやくこの問題が解決して欲しいとおっしゃってました。本邦では、近年、若手の消化器外科医師数が減少しています。こういったシステムの早期導入の必要性も感じられました。

今回は、日本胃癌学会のサポートを頂き本学会に参加させて頂きました。学会、手術見学とも多数の勉強になることを学ぶことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。



KINGCA Week 2024 ポスター会場にて



延世大学 セブランス病院 Hyoungil Kim 先生と